ビザンツ学の新世紀

——第20回国際ビザンツ学会に参加して——

Byzantinology in a New Century:
An Impression in Attending the
International Congress on Byzantine Studies大 月 康 弘^{*}
OTSUKI Yasuhiro

1

第20回国際ビザンツ学会 Le XXe Congrès international des études byzantines は、パリのコレージュ・ド・フランス、また隣接するソルボンヌ構内を会場として、2001年8月19日(日)から25日(土)まで開催された。1924年にブカレストで第1回大会をもった本学会は、第16回オフリグ大会(1961年)以後5年ごとの開催となり、今回で記念すべき第20回大会を迎えた。

今大会は、事前登録者に限っても43ヶ国から952人を集める大集会となった。日本からも、和田廣氏が「ビザンツ社会における宦官」、足立広明氏が「テクラとエゲリア：古代末期における女性の自意識」のタイトルで報告を行った(ご兩人とも本学会員)。いずれも聴衆の関心に応えた報告であり、わが国からも積極的な提言が増える傾向にあることは喜ばしい限りであった。

今コンファレンスは、その規模の大きさに驚かされるばかりではなかった。フランス学界挙げての意欲的なイベント企画、また多彩なテーマ設定に、新世紀を迎えた斯学の新たな新境地開拓の意気込みがうかがわれる大会となった。

全体会議 Séance plénière が8セッション(計65報告)、ラウンド・テーブル Tables rondes が25セッション(計265報告)、自由論題発表がテーマ別に27部会(計448報告)もたれた。このほかに、ルーブル美術館では、13世紀にコンスタンティノーブルからの宝物購入を機に建造されたサント・シャペル Sainte Chapelle に関する特別企画展が、国立図書館 Bibliothèque Nationale(リシュリユー館)では、同館に收藏されるビザンツ写本(中世ギリシア語ほか)の特別展が並行して開催された。さらにはまた、ソルボンヌ構内の礼拝堂でも、フランスにおけるビザンツ学(中世ギリシア学)の歴史回顧展

* 一橋大学大学院経済学研究科助教授

Associate Professor, Graduate School of Economics, Hitotsubashi University, Tokyo

Byzance retrouvée が開催され、市民の関心を集めていた。24日の夕刻には、パンテオン
脇のサン・テティエンヌ・デュ・モン Saint Etienne du Mont 教会で、マルセル・ペレ
ス指揮のビザンツ聖歌コンサートという粋な企画ももたれた。

さて、全体会議とラウンド・テーブルにおけるテーマ設定は、以下の通りであった。

A：全体会議

1. ビザンツ文学の精神と形式
2. ビザンツ帝国における村落の発展：5-14世紀
3. 西方キリスト教世界とイスラム世界に挟まれたビザンツ：芸術作品の贈り物
4. 聖山アトス：芸術における伝統と再生
5. ビザンツ法の研究状況
6. Byzantina-Metabyzantina：時間と空間における辺境
7. ビザンツ帝国属州都市の西欧人
8. 分析工具 (Instrumenta Studiorum)

B：ラウンド・テーブル

1. 経済と社会
 1. 村落：地域研究（帝国北西部）
 2. 村落：地域研究（帝国南東部）
 3. 村落生活の文化的諸相
 4. 村落内における貨幣取引
 5. 紋章学
 6. 拡大時における国家エリート層
2. 宗教
 7. ビザンツ神学：方法と文学ジャンル
 8. 修道制への新たなアプローチ
 9. イスラム進出以前の非ギリシア人東方キリスト教徒
 10. 受難の聖遺物
 11. フロンティアを越えて：ビザンツ後期のイコン
3. 著述と社会
 12. パピルスか羊皮紙か
 13. 外交文書
 14. ビザンツにおける種々の競争
 15. 読むと書く
4. 文学と文化
 16. 書簡と風刺詩：現下の研究と分析方法
 17. 聖人伝と文学史料
 18. ニケーア帝国とパライオロゴス朝期の哲学と諸科学
 19. 聖歌の諸ジャンルとビザンツ聖歌における頌歌
 20. 呪術、儀礼、典礼
5. 帝国の中心と周辺
 21. コンスタンティノープル領域についての新たな研究

22. ビザンツ領北アフリカ
23. ビザンツ領イタリア
24. キリスト教西方世界・イスラム世界間の交換と衝突
25. 2000年紀におけるビザンツとその歴史

2

奇しくも昨2000年は、20世紀後半のビザンツ学界をリードした碩学たちが相次いで逝去する一年となった。『コンスタンティノーブルの陥落』などの著作で我が国でも知られる重鎮サー・スティーブン・ランシマン Sir Steven Runcciman (1902-2000)、ミュンヘンの碩学ハンス・ゲオルク・ベック Hans-Georg Beck (1911-2000)、ウィーン文献学の中心ヘルベルト・フォン・フンガー Herbert von Hunger (1911-2000)、旧東独ベルリンの領袖だったヨハネス・イルムシャー Johannes Irmsher (1923-2000)、またテッサロニキのヨハネス・カラヤノプーロス Johannes Karayannnopoulos (1924-2000)、アテネのニコラス・イコノミデス Nicholas Oikonomides (1932-2000) などである。一昨年には、ソビエト学界の俊英としてスタートしながらアメリカに亡命、広義の文学研究に新境地を開いたアレクサンダー・ペトロヴィッチ・カジュゲン Alexander Petrovich Kazhdan (1924-1999) も逝去している。これら碩学たちの逝去によって、戦後一斉に開花したビザンツ学の一時代にひとつの幕が下りた、そう感じたのは筆者だけではなかったろう。

ビザンツ学は、ルネサンス、また16世紀のユマニズムの隆盛のなかで開始された。とりわけ16世紀フランスにおけるその隆盛は、今なお学術史に燦然たる痕跡を残している。それは、フランソワ 1 世 (1494-1547) の庇護のもとギリシア学の一環としてスタートし、17世紀には、デュ・カンジュ Challes de Fresne, sieur du Cange (1610-1688)、マビヨン Jean Mabillon (1632-1707)、モンフォーコン Bernard de Monfaucon (1655-1741) などが出て、文献学、古文書学の基礎が確立された。その一大成果として、パリ版 Parisier Corpus と呼ばれる史料集成も編纂されている。ビザンツ学は、こうして古典学、文献学一般の隆盛とともに誕生し、今日なおその一翼を担う立場を受け継いでいるのである。大会開催期間中並行して開催された「ビザンツ学回顧展」では、当時の出版物や、聖地への旅のなかで記録された遺跡・遺物のスケッチ原画などが展示され、その間の歴史がコンパクトに示されたいへん興味深かった。

今日のビザンツ学は、しかし他方で19世紀以来の近代史学の洗礼を受けてもいる。とりわけ、19世紀ドイツで形成され第二次世界大戦期までヨーロッパの学問的中心であった「国民経済学」、またマルクシズムの影響を強く受けてきたといってよい。特に、戦後のビザンツ学は、他学問領域との問題共有のなかで、いわゆる「封建制論」を主軸とす

る社会経済史研究を中心に展開されてきた(渡辺金一「ビザンツ封建制の諸問題——論争の展望」『社会経済史学』30・3・4 (1965), 『ビザンツ社会経済史研究』岩波書店, 1968年, 第1論文を参照)。こうして現在のビザンツ学は、過去数百年の学術的歩みの上に、文学(文献学)、古文書学、美術・考古学(印章学、碑文学を含む)等を支柱とする巨大な一大複合研究領域を構成している。今大会でも、上記レパートリーによって、その伝統的作法のすべてが陳列された。重鎮から若手・学生まで、多彩なテーマで行われた個別研究は、各国学界の活発な活動をうかがわせていたし、その先端的個別成果には錚々たる諸業績が多く含まれていた。

3

今大会まで国際学会の長を務めたジルベール・ダグロン Gilbert Dagron 氏(現コレージュ・ド・フランス総長)、またフランス学界を代表してエレーヌ・アルヴェレール Hélène Ahrweiler 女史が、オープニングとクロージングの両セレモニーで講演を行った。両氏とも、ビザンツ学が置かれている状況、また今後の展望に対する期待を語ったが、それは、20世紀後半のいわゆる「戦後ビザンツ学」の歴史的 성격についての自覚を促し、新世紀を迎えて「新たな魅力」を打ち出すべく各員の意欲を喚起しようとするものだった。繰り返すまでもなく、ビザンツ学は20世紀に大きく飛躍した。情報の集積は、他の分野にもけっして引けを取らないまでになった。この世界がキリスト教世界の歴史にとってもった意味の大きさを考えるとき、この学問の重要性を他分野に向けて改めて主張していきたい、云々。

ビザンツなる国家・社会現象が4～15世紀のキリスト教世界においてもった意味について、さらにいっそう議論を深めていくこと。個別諸研究もその方向で収斂すべきこと。そう語るダグロン氏の主張は、けだし正論であり、説得的であった。ビザンツ帝国は、キリスト教世界の中心として、周辺諸民族の社会・国家形成に絶大な影響を及ぼした。その歴史の累積の上に、今日のバルカン情勢もある。中近東にまで広がるキリスト教世界、アラブ・イスラーム社会と東方キリスト教社会の関係もまた、ポスト・ビザンツの文脈における「ビザンツ学」の対象である。思想・哲学・世界観分析のレベルであれ、実態的な地域研究の地平であれ、当該地域の諸問題は、およそ「ビザンツ(キリスト教ローマ帝国)」のプレゼンス・影響を抜きには語れない。ビザンツ学がもちうる意義をアクトチュアルな側面からこう語るダグロン氏の主張は、筆者の念頭からも日頃離れない問題であるだけに、大いに首肯された次第だった。

ダグロン氏は、分析方法についても注意を喚起した。ミクロ・ストリアの手法を含め、社会、経済分析諸学の方法との交流が図られなければならないこと。他の歴史研究領域

で開発されつつある方法や手法から積極的に学ぶこと。それとのコラボレイトのなかで「ビザンツ」的現象の個性把握を図り、その作業のために適切な分析ツールを開発すべきこと。ダグロン氏の主張を筆者はこうまとめたい。現在の作業態度の主流が、個別史料、素材の精査に傾き、その歴史個性的把握への関心が多少とも希薄なことを考えると、現状へのソフトな警鐘であると聞こえた。研究対象を「ビザンツ」に限ることなく、広範な視野のもと戦略的な手法によって研究課題を立ち上げる。そう要請する氏の発言は、果たして集ったビザンティニストたちにどう受け止められ、昇華されていくのだろうか。

4

さて、今回の大会を管見して、他にも印象に残った点がいくつかあった。

(1) まずは、ロシア語が会議言語として使われなくなったことである。筆者は、一世を風靡した19世紀以来のロシア・ソビエト史学の諸業績にかねがね敬意を払っている一人だが、1990年代になって、ロシア学界から以前ほど魅力的な問題提起が聞かれなくなったことが気になっていた。ロシアからの参加者の話では、今回の参加者はモスクワ在住者を中心に99名とのことであった。重鎮リタブリン Guennady Litavrin 氏を筆頭に、若い学生まで多彩な顔ぶれであったが、報告者の使用言語は英語、フランス語に集中していた。ロシア・アカデミー勤務の中堅研究者セイゲイ・イワノフ氏は、「厳しい時期(1943-1948年)のソビエト歴史学」という興味深い標題で招待報告を行った。氏は、聖人伝の校訂、分析などによって国際学界に知られる研究者だが、使用言語は英語であり、筆者らとの情報交換もこれによった。政治体制の転換は、ビザンツ学の領野でもやはり種々の面で波紋を投げかけているようだ。

(2) 21世紀を迎えた今大会でも「都市」「農村」の問題は取り上げられた。全体会議、ラウンド・テーブルの双方で、文学(文献学)的テーマと並びこの社会経済分析の主題が置かれたのは、この学問がなお20世紀後半の尾を引いていることの現れであった。ところが、その大半は禁欲的な地域事例的個別報告であった。かつてのような熱意溢れる問題提起の報告は、管見の限り見られなかった。

40年前、1961年にマケドニアのオフリドで行われた第12回大会では、「都市と農村」問題がメインテーマに設定された。ポール・ルメル司会により、ソビエト研究者を中心に行われた諸報告は、ピクレフスカヤ編『ビザンツ帝国の都市と農村』(創文社、渡辺金一訳)によってわが国にも紹介されている。一連の「問題」は、戦後社会経済史学のビザンツ版として、世界中の多くの研究者の関心を集めた。しかし、この問題群は1970年代になると急速に消沈する。ビザンツという国家・社会現象を「世界史の基本法則」に無

理やり嵌め込もうとする試みが、論陣の違いにかかわらず不適切であると自覚された結果であった。ビザンツ学において、この法則信仰的学問の自己崩壊が見られたのは、東西冷戦構造の瓦解よりかなり以前だった。

この「封建制論争」における問題構制の特徴はいく通りにも論じうる。しかしここでは2つ、それが生産様式論から演繹された「土地の所有関係論」に強力に収斂していたこと、また、階級論に根ざした「富の収奪形態論」に終始したこと、を指摘しておけば十分と思われる。この両関心から、諸事象がコレクトされ、分析され、整理されていった。昨年（2001年3月）邦訳が出来たゲオルグ・オストロゴルスキー『ビザンツ帝国』（恒文社、和田廣訳、ドイツ語原版第3版1963年刊）は、この20世紀の学問潮流から生み出された精華であった。

現象は、観察者（研究者）によって分類し、分析されるために存在するのではない。各々の事象や遺物は、それぞれ固有の文脈のなかで生成され、痕跡を残した。その意味では、「封建制論」が、近代主義的学問の傲慢によって過去事象を「分類」したことは批判されるべきであるし、事物の丁寧なりトレースをモットーとする今日的方法態度が「適切」であることは間違いない。「科学」たらんとした20世紀後半の方法態度の反省の上に、今日のビザンツ学が、本来の作法である文献学的、美術史・考古学的な地道な作業の禁欲に立ち戻っていることは、上述の通りである。その態度は大切にされなければならない。しかし、だからといって、事物・情報の収集、分類ばかりを偏重して、ある種のフェノメノロジーに終始するのでは、この学問がもつ本来的魅力を他分野に対してアピールできないことも言うをまたない。分析対象を「大状況」の中に多面的に位置付け、意味付ける努力が求められる所以、というわけである。今大会を機に会長職をペーター・シュライナー Peter Schreiner 氏（ケルン大学）に譲ったダグロン氏の「心配」を、われわれは果たして杞憂と言い放っていられるだろうか。

次回第21回大会は、2006年夏ロンドンで開催される。